

# 千葉の谷津田に

# トキよ 舞え

トキがまたび千葉の空を舞うように。二十一日、千葉県立中央博物館でシンポジウムが開かれ、日中生態保護研究会代表、環境文化創造研究所主席研究員の藤澤山さんが「中国のトキの保護と生態農業」と題して基調講演しました。

## 中国の研究者招きシンポ

約五十年前、太田洋樹氏において野生のトキが最後発見された。トキは、かつてはロシア、朝鮮半島、中国、日本に広く分布し、野生で生息していました。中国では一九六三年に姿を消しましたが、八一年五月に、中国内陸部にある洋泉の山中で七羽が発見されました。洋泉では冬

谷津田(やつた) 谷津田の底の平かな細長い谷が樹林帯に入り込んだ地形を谷津田といいますが、その谷の底には見られる湧水豊かな田んぼを谷津田といいます。河川の谷間には雑木林が広がっています。

キの生息記録も多く残されています。「千葉の谷津田は野生のトキが生息する中国・洋泉の風景とそっくり」ともいわれています。二十世紀半ばに激減したトキは、かつてはロシア、朝鮮半島、中国、日本に広く分布し、野生で生息していました。中国では一九六三年に姿を消しましたが、八一年五月に、中国内陸部にある洋泉の山中で七羽が発見されました。洋泉では冬

の後、トキの保護政策を実施し、この二十年間で二百羽以上の繁殖が確認されています。



中国・洋泉の野生のトキ—藤さん提供

冬期過水(たんすい)田(冬に水をためておく田)はトキの理想のエサ場です。洋泉の自然保護区域は三千七百四十九ヘクタール。エサ場を確保するうえで、自然保護区域の農業、約二万四千七百ヘクタールの活動は不可欠です。トキの保護活動をするためには、地域住民の理解も徐々に広がりました。

### トキと人間の信頼関係が

「民家の二―三十歳先にトキの営巣場があり、トキが民家に遊びにきます。水田で働く人々のすぐ後をトキが悠々と歩き、トキと人間が信頼関係を結ばれていることが分かります。私たちから来た人間が正しくトキと接してこなければなりません。」

しかし最近では、冬の間に農作業をする農家も多くなり、冬場のエサ確保が難しくなっているところもあります。「今後は、経済発展の影響で環境変化も懸念されます。トキと人間の共生関係を築いていくためには、共生できる農業と地域社会の美観が課題です。千葉の豊かさが自然に育まれている。トキ復活の可能性は十分あります。この豊かさに私にも協力してほしいなと思います。」と語りました。

### エサ場確保と地域の協力

この成果として藤さんは、エサ場の確保と地域の協力が重要なポイントだといっています。

「トキのエサは、ドジョウやタニシなど水田に生息する生物です。エサを確保するために、農業者は肥料を減らさず、昔ながらの農法を続けることが大切です。そのために、地域の農家が有機肥料や堆肥を使わないよう呼びかけました。」



トキと谷津田・里山についての講演と意見交換がおこなわれたシンポジウム—21日、千葉市



参加者の質疑に答える藤さん—左から2人目

トキがまたび千葉の空を舞うように。二十一日、千葉県立中央博物館でシンポジウムが開かれ、日中生態保護研究会代表、環境文化創造研究所主席研究員の藤澤山さんが「中国のトキの保護と生態農業」と題して基調講演しました。